

金が貯まったためしがない。これまで生きて一度も、である。大学時代はバイトを三つ掛け持っていたし、出版社に就職したので人並みの給料もいただいた。フリーになつてからも極端に食い詰めることはなかった。それなのに預金残高は常に風前の灯火といったていなのだ。

金遣いが荒い、ということではない。朽ちかけた一軒家に住み、家具はどれも二束三文の古道具、美食家でもなければ着道楽でもなく、買い込むものといえば本とCD程度という大変つましい暮らしぶりである。私が「金がなくて……」とぼやけば、友人知人は私の風体を眺めたのち「なにに使つてんの？」と異口同音に訊く。訊かれたところで、思い当たる節はない。もしかすると私の口座だけブラックホールかなにかに繋がっていて、知らぬうちに金が吸い取られているのでは、と密かに疑う日が続いていた。

内田百間の随筆を読んだのは、そんな折。こんな一文が目飛び込んできた。「お金が這入っても、私の手が触れると同時に雲散霧消するから、もともとちっとも変わりはない」。ここにも貧乏の理由がわかっていない者がいる！ 私は同志を得たように嬉しく、彼の日記や随筆を読みあさった。



絵・江口修平

## 右から左

木内 昇

百間は東大を出たのち官立学校の教官となり、そこそこ高給取りであった。文士になればなったで本もすっかり売れている（私と大違い）。それなのにいつも借金取りに追われ、明日の米にも事欠く始末。なにゆえ？首を傾げつつ読み進めると、次第に彼の支離滅裂な行状が浮かび上がってきた。

借金をしに外出したのに、帰りに車を呼んでしまう。電車賃として支度した金でうっかりライスカレーを食べてしまう。いずれも当人には「金を使った」意識がなく、「あはるはずの金が消え失せた」という不可解だけが残っている。挙げ句途方に暮れて「福の神が家の周りを取り巻きて、貧乏神の出どころもなし」と洒落ている。

ゾツとした。私もきつと百間と同じ病に冒されているのだ。つまり、金に対する集中力が極度に欠乏しているという病である。そりゃあ金だって、いつも気にかけて、ていねいに接してくれる人のもとにいたいだろう。無意識のうちに金への注意力が途切れる私のような者といえるのは、プライドが許さんだろう。私は反省した。が、ではどうやって注意力を保てばいいのか、それがわからない。わからぬままに一生涯、金と縁遠い暮らしをすることになろうと思えば、気の重い今日この頃なのである。

きうち・のぼり●作家。1967年東京生まれ。インタビュー誌『Spotting』を主宰する傍ら、単行本、雑誌などで執筆や編集を手がける。著書に『新選組 幕末の青嵐』『地虫鳴く』『茗荷谷の猫』『浮世女房洒落日記』など。2009年、早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞受賞。2011年『漂砂のうた』で第144回直木賞受賞。



撮影 集田大輔